

死者との別れ

——マレーシア潮州人漁村に見られる

葬送儀礼の事例から——

川 崎 有 三

- I. はじめに
- II. 生者・死者・祖先
 - i) 生者と祖先
 - ii) 葬送儀礼の社会的な意味
 - iii) 死者との別れの過程
- III. 死から埋葬まで
 - i) 死から納棺まで
 - ii) 納棺後の儀礼
 - iii) 葬送と埋葬
- IV. 埋葬以後
 - i) 百日の喪
 - ii) 百日目の喪明けの儀礼
 - iii) 清明節
- V. おわりに

I. は じ め に

多民族国家マレーシアにおいて、各民族間の差異を際立たせているもののひとつは宗教である。たとえ共通の国語であるマレーシア語を共有していても宗教の違いは各民族を分離させるようにはたらく。概括的に言えばマレー人はイスラム教、インド人はヒンドゥー教、中国人は仏教と道教の要素が混在した伝統的な宗教を信奉しているという事ができる。

中国人の場合、彼らの宗教活動は教義・原典に基づく、信仰の具現化というよりもむしろ、神、祖先、⁽⁵⁾「幽霊」などの超自然的な存在に働きかけて「ご利益」を得るところに眼目がある。中国人の宗教活動にはこの超自然的な存在への依存度の違いによって大きなヴァリエーションがある。しかしながら葬送儀礼のみは中国人の宗教活動における必須であると言ってもよいほどであり、他の宗教に帰依していない限り、中国人であることは中国語を話す事以上に中国式的葬送儀礼を営むことによって表現されるとさえ言う事ができる。⁽⁶⁾

葬送儀礼は祖先崇拝の儀礼的な一面である。本土の伝統的な中国社会にあっては祖先崇拝が父系血縁集団と密接な結び付きを持っていた。機能的な父系血縁集団を欠くマレーシアの中国人の間にあっても祖先崇拝は世帯ないし既婚の兄弟間において重要な意味をもっている。しかしながら筆者が1980年から1982年にかけて調査を行った潮州人漁村S村⁽⁷⁾での資料に基づいて言うならば、世帯において祭られる祖先は世帯主の高々2世代上までであり、祖先崇拝は集団の結束を固めるというよりもむしろ世帯の来歴を表し、親世代から子世代へと受け継がれてきた民族の伝統を再確認させるという機能を果たしていると言う事ができる。本論文ではS村に見られる葬送儀礼を記述し、その社会的な意味を死者との別れの過程を通して分析する。

Ⅱ. 生者・死者・祖先

i) 生者と祖先

村人はいつも祖先と共存している。祖先の居場所は村の中に明確な位置を占めている。ひとつは村の共同墓地であり、他のひとつは子孫の世帯の祭壇である。墓地は村はずれにあり、ふだん村人が墓地に立ち入る事も、そのそばを通る事もない。墓地が村人の関心を集めるのは清明節の時かあるいは埋葬の時に

限られる。実際、墓地は雑草におおわれている事が多く、その存在自体も明らかではない。墓地の中の祖先は日常生活においては言わば忘れられた存在である。

これと対照的に世帯の祭壇にある祖先は常に村人の視野の中にある。世帯における祭壇の位置付けは、その空間的な配置の中に表われる。S村における家屋の構造は基本的に客間、寝室、台所、便所・水浴場、物置きの5つの構成要素からなる。これら5つの要素のつながり方には様々なヴァリエーションがある。しかしながら共通して言える事は、どのような場合であれ、常に客間がその中心になるという事である。客間はその世帯における最も公共的な場であり、世帯外の人々にも開かれた空間である。客間は常に外に向かって開かれており、その戸口は世帯の内外を区切る境である。そしてその戸口に相対しているのが祭壇である。つまり祭壇は世帯の構成員にとってはその中心であり、外部の者に対してはその世帯を代表する顔である。

祭壇はまた神と祖先が共存する場である。神を具象するものはその姿を描いた像、画あるいは文字そのものであり、祖先はただ「香炉」(線香をたてる器)によってのみ表わされる。この村において最も一般的な神は「大伯公」であり、ほとんど全ての世帯の祭壇に祭られている。⁽⁸⁾位牌はどの家でも見られず、その代りに「香炉」に「阿公」(父親)、「阿媽」(母親)、「老公」(父方祖父)、「老媽」(父方祖母)という親族名称か「謝公」、「盧公」のようにそれぞれの世帯の姓を書きこんだ赤い紙をはっている事がある。しかし多くの「香炉」には何も紙がはられておらず、それぞれの「香炉」ごとに父母、祖父母のものという具合に観念されているだけである。世帯主の父母、父方の祖父母以外で祭られている例は妻、前妻、妻の兄、妻の祖父、母方の祖父母、兄、弟、弟の前妻、実父(父の弟に養子としてとられた場合)などの例がそれぞれ1例から数例見られる。妻方、母方の親族を祭っている場合には母方の家に住んでいたり妻方の両親と同居している事がある。

祭壇には農暦の毎月1日、15日をはじめ、さまざまな祭日に供物が捧げられる。また線香をもって毎日拝する世帯も全世帯のおよそ1/3程度ある。世帯構成員にとって客間は憩いの場であり、また結婚式・葬式においては儀礼の場となる。客間にはテレビ、ステレオ、ソファーなどが置かれ、左右の壁には家族の写真、各種の賞状が貼られる。結婚式においては客間はその最も中心的な儀礼である「送茶」の場となる。祭壇を背にして新郎・新婦から茶のサービスを受けた親族はその結婚を承認したしるしに、その茶を飲み干し、「紅包」（ご祝儀）を渡す。この時、客間は新しいカップルを承認する場となる。客間は祭壇によって、つまり神と祖先によって認可された公の空間であるとも言う事ができる。実際、客間と村の廟との間には祭壇やその他「拝神」（神を拝む事）に関わる物品の空間的配置について驚くべき同型性が見出される。

ii) 葬送儀礼の社会的な意味

葬送儀礼は遺族と死者との別れの儀礼である。と同時に村全体にとってもまた重要な意味をもっている。まず第1に葬送儀礼は潮州人の文化的伝統を再認識させる。葬送儀礼における死者の取り扱い、遺族並びに参列者の振るまい、象徴的に用いられる各種の物品は潮州文化の要素・様式であり、潮州人にはこの文化を再確認させ、非潮州人にはこの文化を習得させる。潮州系葬儀社の者が演じる「功德」（葬送劇）は村民全体にとって潮州文化の劇的再現である。

第2に葬送儀礼は村を統合させる。結婚式への参加が選択的であるのと対照的に葬送儀礼への参加はどの村人にとっても選択の余地のない義務である。遺族への弔慰金はほとんどの世帯からも集められ、多くの世帯は何らかの形で労働力を提供する。葬送儀礼の間村人たちの経済活動は休止し、漁に出るものはない。村人の関心は死者の家に集約され、村の中心は死者の家に移り、村人たちはそこにたまる。またすでに村外へ転出していった者でも村との関係を保ち、なお且つ有力である者たちの多くは村の葬送儀礼に戻ってくる。最も極端

死者との別れ

な場合には葬送儀礼は村を一時的に村外に移動させる事さえあるのである。村の有力者「通」⁽⁹⁾の母親が亡くなった時には、隣州ペラ (Perak) 州のビド (Bido) にある「通」の長兄の家に村のおもだった世帯主たちは泊まりがけで集まったのである。

第3に葬送儀礼は村の社会関係を明示する。葬送儀礼に最も関連の深い社会組織は葬式のための相互扶助組織⁽¹⁰⁾である。日常的には顕在化されないこの互助組織は葬送儀礼の時に最もその機能を発揮する。実際、葬儀社により行われる儀礼を除けば、他の葬送儀礼の過程は遺族とこの互助組織によって担われる。また葬送儀礼に関わる様々な形で村人の援助は遺族と彼らの社会関係の密接さの度合を反映させる。

第4に葬送儀礼は父系親族を連帯させる。葬送儀礼は死者の子孫たちにとって最も重い義務であると同時に、一方では父系親族が一同に会する数少ない機会を提供する。結婚式の儀礼の時には参加する親族は新郎の父方、母方の双方に広がり、場合によっては母方親族の方が多しこともあり、新郎を中心としたキンドレッド⁽¹¹⁾による儀礼の色彩が強い。しかし葬送儀礼においては父系親族とその配偶者に参加者は限定されており、死者の父系血縁者の集団による儀礼という色彩が強く、父系親族間の連帯を強める働きをしている。但し父系血縁者の配偶者（例えば死者の娘の夫）もその役割を儀礼の中で果たしており、葬送儀礼を単に父系血縁者のみの集団による儀礼と言う事はできない。

iii) 死者との別れの過程

死者との別れの過程を分析するにあたって、次のようなカテゴリーに人びとを分類するのが妥当である。死者、遺族、村人、村外に出て行った者、村外の友人・知人、葬儀社の者である。死者は生者との別れの過程において各段階ごとに応じて様々な形を変えて表象される。遺族となるのは基本的に死者の子孫たちとその配偶者たちである。夫が死んだ場合妻は遺族となるが、妻が死んだ

場合夫は遺族というカテゴリーの一員としての役割を演じる事はほとんどない。子孫は重い義務を負うが、その配偶者の場合、子孫の夫であるか、妻であるかによって担う役割を異にする。死者の直接の子孫でなくとも、死者と何らかの父系血縁関係をもつ者は遺族と同様の役割を担う事もあるが、多くは弔問に訪れるのみである。但しこうした父系血縁者は一般の村人に比べて遺族への援助の額が多い。⁽¹²⁾

村人たちは村の一員としての死者への義務を世帯を通して行う。村人たちはそれぞれに死者を出した世帯および死者の子孫たちの世帯と個別的な独自の社会関係をもっており、彼らの葬送儀礼への関与の仕方はこれらの社会関係に応じてかなり異なる。特に同じ互助組織に加入している場合関わりは深い。村外へ出ていった者も「功德」の行なわれる晩には姿を見せる事がある。彼らにとって葬送儀礼は村人たちとの旧交を暖める良い機会であり、彼らと村とを再び結びつける役割を果たす。村外の友人・知人は村人たちと同様に遺族を援助する。葬儀社の者は遺族といわば契約関係にあり、彼らがその役割を演じるのは「功德」と埋葬に関わる事のみである。村にやって来る葬儀社は固定されていないが、同じ葬儀社が幾度か訪れる事もある。

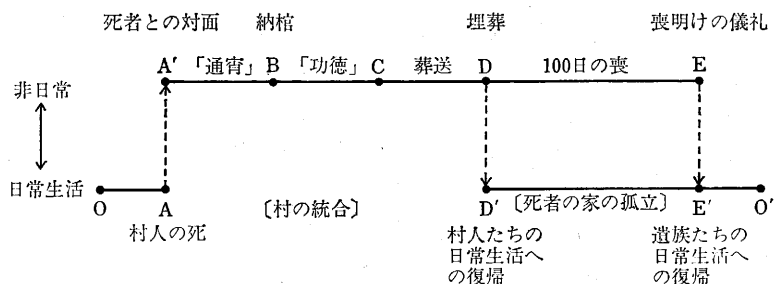


図1 死者との別れのダイアグラム

死者との別れ

葬送儀礼は「功德」がその中心をなすように見えるが、むしろ次のダイアグラムで表したような過程の全体が重要な意味を持つのである。(図1参照) 村の日常生活は村人の死によって打ち破られる。死者の出た家はただちに生者の家から死者の家へと変わる。村人たちの関心は死者の家に集まり、世帯主たちは日常活動を停止してそこにたまる。(AからA'へのジャンプ) 遺族は死者との対面により死の厳粛な事実を悟り、死者と第1の別れをする。死者は遺族と互助組織のメンバーによって、夜通し見取られる。翌日棺が到着すると、遺族は納棺前の儀礼を行い、村人たちによって死者は棺に納められる。遺族はもう二度と死者の姿を見る事はできず、ここで死者と第2の別れをする。これ以降死者は棺によって表わされる。

納棺後、「功德」の準備が進められ、村人、村外に出ていった者、村外の友人・知人から弔慰金が集められる。「功德」は葬儀社の人びとと遺族たちによって行われ、世帯主のみならず、村人たち及び弔問者たちは皆「功德」の観衆となる。「功德」の中で死者は遺族たちによって象徴的に「この世」から「あの世」へと送られ、遺族たちは死者と第3の別れをする。翌日、葬送前の儀礼が遺族と村人、村外の友人・知人によって行われ、棺は葬送の列を従え墓地に向かい、遺族と村人たちによって埋葬される。遺族にとって葬送・埋葬は第4の別れであり、村人たちにとっては葬送のみが死者との別れの儀礼となる。埋葬が終わると村人たちは日常生活へと復帰する。(DからD'へのジャンプ)

しかしながら、遺族たちは日常生活に復帰する一方で埋葬後も100日の間絶えず服喪の制約を受ける。特に死者の家は日常生活に戻ることなく、死者と共存する。死者は墓地に存在すると同時に、死者の家の客間に椅子(衣装が掛けられる場合もある)・写真・仮の「香炉」として表象される。この100日の喪の間、遺族は定期的に死者の家に集い、儀礼を行う。この儀礼には村人たちは一切関与しない。100日目の喪明けの儀礼が遺族たちによって行われると、遺族は死者と最後の別れをして、初めて祖先として死者を世帯の祭壇と墓に定位す

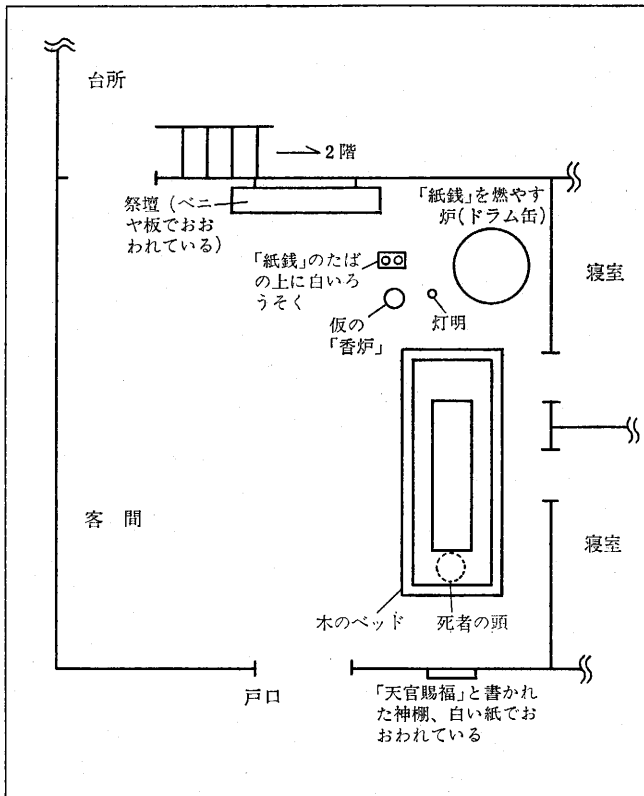
る。祖先は墓と「香炉」によって表される。こうして遺族たちも村の日常生活へ完全に復帰する。(EからE'へのジャンプ)

村人たちの死者との別れの過程は、生者をその死を契機にして祖先として社会的に位置づける過程であると言う事ができる。死者とはこの生者から祖先に移るまでの移行過程における呼名であるに過ぎない。死者が存在する間、生者である遺族たちは死者と同様に日常生活から逸脱した移行過程にある。死者の親族が100日の喪の間死者の世界と関わるのと対照的に、村人たちは葬送をもって死者との別れを終えてしまう。村人たちは遺族たちへの金銭的な援助と労働力の提供をするのが主であり、儀礼への参加はわずかに葬送前の死者への参拝、葬送への参列に限られる。彼らにとっては生者のみが意味あるものであり、彼ら自身にとって祖先となりえない非親族の死者は埋葬を契機にして「無縁」に近いものになってしまう。従って埋葬までは死者の家を中心とした村の統合が強く現われるが、服喪期間中の死者の家は村の中で孤立してあり、それはちょうど宇宙のブラック・ホールのように、「生」の活力が充溢している村の中であって遺族たちの「生」の活力を死者の世界へと引きずり込んでいくのである。遺族は喪明けの儀礼によって初めて死者を祖先として位置づける事ができ、死者の世界と縁を切り、生者と祖先が共存する生者の家に戻り、村の日常生活へと復帰するのである。

Ⅲ. 死から埋葬まで

筆者が本稿で叙述する葬送儀礼は筆者自身が観察した次の5つの事例に基づいている。i)「瑞」本人、61才; ii)「栴」の母親、87才; iii)「通」の母親、74才; iv)「勤」の妻、50才; v)「耀」の父親、70才、それぞれの事例において細部の異同があるが、本稿においては筆者が最も広汎に儀礼を観察することができたiii)の例を主として他の例は補足的に叙述する。S村にあっては

図2 死者の床



旧来からの慣習が十分には伝承されておらず、葬送儀礼に限らず儀礼一般について村人の知識には曖昧な所が多く、細部にわたって形式化された正統的な型を見出す事は難しい。以下の叙述では各事例に共通する一般的な葬送儀礼の骨組みを描くように努めた。

i) 死から納棺まで

＜死への準備＞ 死は不意にやって来ることもあるが、また徐々に死の領域へ

と移って行く事もある。間近な死があらかじめ予知されるような場合、それはしばしば老人においてみられるが、なりうべき死者はその子孫、特に長男の家でその死を迎えるよう準備される。例えば「通」の母親は病気が重くなるまで「通」の弟の「桂」の家に住んでいたが、いよいよ病気が重くなってから「通」の長兄「文」の家に送られた。

医療制度が十分に完備されていないこの村においてはつい数日前まで平常通りに暮らしていた者が急に病気になって病院に入院し、数日を経ずして死亡する事がままある。例えば「瑞」や「勤」の妻は死の前日に村からクアラルンプール (Kuala Lumpur) の病院に運ばれた。そのような場合、死者は病院において納棺され、棺の姿をとって村へと運ばれる。「瑞」の場合は村の互助組織のひとつである「互助部」が管理している空家となった家屋に、「勤」の妻の場合は「勤」の親族が多く住んでいる近くのスンガイ・ブサル (Sungai Besar) の町の「海産公会」(漁業関係者の団体)の建物に安置された。

〈死者との対面〉 医師によって死亡が確認された死者は客間に横たえられる。(図2参照) 遺族は死者の髪を梳かし、顔を洗う。死者が女性の場合、生前使っていた髪飾りは長男の妻に渡される。死者は黒のズボン、青の上着を身につけられ、その上から上半身だけの青色のガウンを着せられる。頭には黒い頭巾をかぶり、それは真珠ひとつで留められる。死者が枕にしているのは「金⁽¹³⁾紙」である。死者の床は木製の台の上にマットレスが置かれ、白い布が敷かれる。その上に死者が横たわり、死者には白い布と(白い紙の場合もある)その上からさらに巾の狭い赤い布が掛けられる。

この時遺族は死者と第1の別れをする。すなわちもはや死者との間には生者同士のやり方でのコミュニケーションの回路は閉ざされている。今までの生者の家は死体の安置された死者の家となり、客間の中の「生」の要素はすべて姿を消す。祭壇⁽¹⁴⁾、各家の由来を表す戸口の額⁽¹⁵⁾、戸口の小さな神棚⁽¹⁶⁾はベニヤ板或いは白い紙や布で覆われる。客間の中から死者と関わりのない一切の物品が排除

死者との別れ

される。遺族はこの時から葬送儀礼の準備にかかる。準備の第1は遺族の喪服作りであり、第2は棺の手配、第3は葬儀社への依頼である。この準備には死者の家と関わりが深く、儀礼にたけた村人が相談役として加わる。棺の手配は近くの町では間に合わずかなり遠くの町へ出かける事が多い。葬儀社は近くの町で済ませる事もあるが、ペナン (Penang) など遠方から呼ぶ事も少なくない。死者の知らせはほどを経ずして村中に知れ渡り、村人たち（ほとんどが世帯主の男、死者の親族・友人を除いて女性が死者の家を弔問することはほとんどない）が死者の家に集まり、家の前のベランダに3人、5人と固まっている。そのうち彼らはベランダや前庭に出されたテーブルごとにマージャン、トランプなどのゲームを始め、人が賑わう。死体の安置された客間の静謐とは対照的に、ベランダや前庭にいる村人たちは遠目にはゲームに打ち興じているようにも見える。

死者の床の前には、死者のためにしか用いられない白いろうそくと「金紙」／「銀紙」が置かれ、この時から遺族は幾度も線香をもって死者を拝し、「紙⁽¹⁸⁾銭」を焼く。「紙銭」は焼かれる事によって初めて死者のもとに届く。この場合の焼くという行為は生者から死者へのコミュニケーションのひとつの手段である。村外の親族も知らせを聞いて次々にかけつける。子や孫にとっては死者との対面は必須であり、しかもできるだけ早くしなければならず、遠くに住む子や孫は万難を排して死者の家に駆けつける。知らせを聞いて、とるものもとりにあえず死者の家にやってきた死者の娘が、戸口に駆け寄るのもおぼつかず、足もたたぬほどに膝をつき、四つん這いになってかろうじてにじり寄り死者の床にすがりついて慟哭する。死者に何か話しかけるようにして叫んでいる。死者との対面は親族にとっては知らされた死を目のあたりに見る極めて衝撃的な一場面である。線香で死者を拝した後、死者の床の周りに並び、死者の顔を次々に見ると、大の男でさえ、あたりはばかり号泣する。また死者の手を握る者もあり、腕や足をさする者もいる。この死者との対面はこれから始まろうと

する死者との別れの第1段であり、言わば別れの始めである。

死者の最後を見取る事ができなかった遺族たちは、見取った親族にその最後の子細を聞く。これは見取った親族の務めであり、幾度も幾度も遺族が来るごとに飽くことなく繰返し語られる。一通り死者との対面を終えた遺族たちは、理性を取り戻し、葬送儀礼の準備を始める。喪服作りだけでもゆうに一晩はかかる仕事であり、遺族は順次喪服に着替えるが、儀礼の一部には間に合わない事もある。

＜⁽¹⁹⁾通宵＞ 死後の第1の儀式は「通宵」である。この儀式には葬式のための相互扶助組織が関与する。彼らは寝ずに死者を見取らねばならず、時間交代の要員の表が死者の家の戸口に張り出される。⁽²⁰⁾ その間遺族は交代で「紙銭」を燃やし続ける。客間は紙の燃えがらとススそれに死体からの臭気で凄惨な装いを見せる。

＜⁽²¹⁾納棺＞ 翌日棺が到着すると村人が集まり、棺を家の前庭に置く。棺は非常に重く、丸太と太いロープ、それに十数人の男たちの息を合わせた協同作業を必要とする。納棺前の儀式は遺族たちによって行われる。空の棺の上には頭の方から順に「紙銭」⁽²²⁾、「餅」⁽²²⁾、「紙銭」にさした赤いろうそく2本と線香3本、赤い「茶杯」（茶または茶の葉のはいった盃）2つ、「種子」、そしてまた「紙銭」が置かれる。「種子」は稲のモミ、小さな鉄釘、ビスケットを「成樹」と呼ばれる小枝と一緒に白布でくるみ、それを麻の糸でしばって作られ、葬送儀礼の中で「生」の象徴としてしばしば用いられる。⁽²³⁾ この空の棺を前にしての儀礼は次のように行われる。

- 1) この棺の前後を死者の長男（ないし長男の長男）が拝む。
- 2) 遺族がひとりずつ順に家の戸口側⁽²⁴⁾に立って「種子」を持ち棺の頭から足に向かって3度こする。
- 3) 遺族が一通りこすり終わると「種子」は遠くに投げ捨てられる。
- 4) 遺族は一斉に泣き出す。

死者との別れ

次に遺族たちは死者の床にある死者と別れの儀式を行う。⁽²⁵⁾死者の上に掛けられていた赤と白の布は取り去られ、死者の胴の上にひもで結ばれた2つの白い袋（中に「紙銭」がはいっている）が左右に分けて置かれ、その横（足の側）に白い扇子がかなめを頭の方に向けて広げて置かれる。

1) 遺族は家の中に入り遺体の頭から向かって右手にひざまずき、ひとりずつ「成樹」を陶器製の蓋のない急須の水にひたし、それで遺体を頭から足にかけて3度こする。（この時遺族の大半は泣き続けている。）

2) 村人の一人（饗礼にたけた者）がその急須の水を客間の四隅に少しずつまく。

3) 遺族がひとりずつ白い扇子で1)と同じ要領で頭から足にかけて遺体を3度こする。

遺体は棺に納められる。この納棺は主に村人たちの手で行なわれる。遺族たちの多くはただ見守るだけである。棺の蓋が開けられると中には黒い紙がはられている。その中に「金紙」／「銀紙」の厚い束が2、30束投げこまれる。その上から模造紙大の幾重にも束ねられた紙を重ね合わせるようにして棺の周りを覆う。さらにその上から一回り小さい紙で同じように覆う。遺体を下に敷かれていた布ごと棺に移す。その上からまた「金紙」／「銀紙」の束が入れられる。棺の周りの紙で遺体を覆う。紙と「紙銭」の中に横たえられた死者は蓋をされるともう2度と顔を見る事ができない。この時が遺族と死者の最後の対面となり、遺族の中には泣き叫ぶ者もいる。棺の蓋がされると「黒油」（タール）で密閉されて白い紙テープが巻かれる。棺の四隅に赤い布きれが置かれ釘が打たれる。⁽²⁶⁾もはや死者の姿はなく、ただ棺のみが死者の存在を表す事になる。ここで遺族は死者と第2の別れをする。

ii) 納棺後の儀礼

＜葬儀社の儀礼＞ 夜になってから今度は葬儀社の者に先導された儀礼、「功

(27)

徳」が遺族たちによって行われる。「功德」は一晩ないし二晩で行われる。しかし「瑞」の場合だけ行われなかった。この事について、村人たちは「功德」をする場所がとれないからと表面的な理由を述べていたが、筆者の観察によると経済的に困窮していて、まだ子供たちが十分な働き手となっていない、親族・姻戚もごく少ない「瑞」の遺族たちにとって「功德」の経済的な負担は耐えきれなかったのではないと思われる。実際、どのような「功德」を行うかによってその費用は変わり、遺族の間で「功德」をめぐる意見の対立がおこる事もある。遺族たちのほとんどはこの儀礼の委細を知らず、ただ葬儀社の者の指示に従って行うのみである。儀礼の主要はどの葬儀社でも同じであるが、細かな点についてはかなり異同が多い。この時の遺族たちの服装はかなり厳格に定められる。息子、娘、息子の妻、孫といった親族関係によるカテゴリーごとに喪服は決められる。例えば、「通」の母親の時には表1のような服装であった。息子のうち長男のみは上半身にランニングシャツしか着けず、他の兄弟とは違⁽²⁸⁾う。儀礼全般にわたってこの長男が喪主としての特殊な地位にあることが明示される。また娘は既婚であると未婚であるとを問わず同じ喪服を着け、たとえ婚出しても娘の親に対する服喪の重さが変わらない事を暗示している。

家の前庭は「功德」ができるように準備される。棺には「寿」の字を刺繍した立派な布が掛けられ、客間に置かれる。棺の前には死者の写真、仮の「香炉」などが置かれ、死者の祭壇が作られる。戸口の左手には阿弥陀佛をはじめ⁽²⁹⁾仏像が三体描かれた布が掛けられ、その前に祭壇が作られる。その横には楽隊が座る。楽器として使われるのは「琴」、「二胡」、「鼓」、「鑼」などである。家の前庭には仮設の屋根がつけられ、何ヶ所かに電球が取り付けられ、歓衆は前庭を取り囲むようにしている。司祭役の者は儀礼用の服を着ており、遺族は喪服に着替えている。

司祭役に先導されて遺族たちは死者の表徴のひとつである竹竿をもち、死者を「あの世」（「陰府」）へと送り出して行く。「あの世」への道筋の長さは幾

死者との別れ

度となく繰返される客間および前庭での周回運動により表現される。遺族たちは常に線香をもち、線香で死者を拝する事によって阿弥陀佛の力で死者を無事に「あの世」まで連れて行くのである。途中、「魔よけ」の符が戸口と棺に貼られ、「紙の家」によって表現された死者の世界を拝し、また本物のコインが通行料として払われる。最後に死者を「あの世」に引き渡すための許可証をもって「この世」と「あの世」を結ぶ橋を渡り、死者を無事に「あの世」に引き渡し、遺族たちはまた橋を渡り戻って死者との別れをする。（この儀礼の詳細については末尾の資料を参照の事。途中に城門を打ち破る劇が演じられる事もある。）

この葬儀社の儀礼は葬送儀礼のうちで最も形式的なものである。形式的であるが故に遺族たちの参加の態度は真剣というよりもやや押し着せ気味であり、遠い親族の中には儀礼の途中でやめてしまう者もいるし、孫のような近い親族であっても儀礼の最中にタバコをふかしてとがめられる者もいる。熱帯のマレーシアでは夜とはいえ喪服を重ねて着るのは「辛苦」（辛い事）であって遺族たちは汗を拭き拭きその務めに耐えている。また司祭役の者も休憩時にはその

表 1 遺族たちの喪服

関係 \ 服装	かぶりもの	上着の色	帯	ズボンの色	備 考
息 子	麻	白	死者の衣服	黒	
息 子 の 妻	白布	白	死者の衣服	黒	
娘	白布	白	白布	黒	未婚、既婚を問わない
娘 の 夫	白布	白*	白布*	白*	*黒か青でもよい
孫(息子の子供)	麻	白／黒	青布	黒	
孫 の 妻***	青布	青**	青布**	青**	**白か黒でもよい
外孫(娘の子供)	青布	普段着で帯はつけない。			

*** 婚約者は青のかぶりものの前に赤い布きれをつける。

衣装をとり、この儀礼は日本の葬儀のような厳粛さよりも儀礼を演じるという劇的な色彩が強い事がうかがえる。儀礼には多くの観衆が集まる。村人たちは煌々と明りのつけられた前庭で演じられる「潮州劇」を熱心に見守る。100人を越える観衆が集まる事もまれではない。彼らがそこに見るのは村の廟の祭と「功德」においてしか見る事のできない潮州語による劇である。彼らにとって「功德」は楽しみであると言ってもよく、「功德」についてきれいであったとか素敵であったという評価がされる。「功德」はただ単に遺族による葬送劇というばかりでなく、村人たちに対しても自分たちが潮州人である事を再確認させるのである。

この儀礼が行われる前に各世帯から弔慰金が届けられる。弔慰金は現金のままで渡され、係の者によって名前と金額がノートに記入される。弔慰金の額は数ドル（1マレーシア・ドルは当時約100円）から数十ドルであり、十数ドル⁽³⁰⁾程度が最も多い。但し会社組織からの場合には100ドルを越える事もある。そして赤い糸で結ばれた2個のアメ玉が弔問者に渡される。この赤は生者への言わば「生」のメッセージである。儀礼の合間には観衆たちに粥のサービスが行われる事もある。村人たちに対するこの種の食事のサービスは村人たちの遺族に対する評価を決める目安となる。待遇の悪い家に対しては「ケチ」だ、「出し惜しみ」だなどという評価がなされる。それは葬送儀礼への参加が村人の義務であり、遺族たちに何らかの援助をしなければならないと考えられている一方、遺族たちもそうした村人たちの援助に対して十分なもてなしをすべきであると思われるからである。

死者の家と親しい村人たちは中国語新聞に死者を哀悼する広告をのせる事がある。その時には「慈範長存」（比較的長命であった婦人に）、「福寿全歸」（長命であった男性に）、「音容宛在」（比較的若くして亡くなった婦人に）のような哀悼の句が掲げられ、死者の死亡年月日、年齢および広告をのせた者たちの名前が書かれる。

死者との別れ

またある程度規模の大きな葬儀の時には（例えば有力者の「勤」や「通」の親族の場合）死去の知らせが死者の息子たちから、また葬送の日時を知らせる案内が「治喪委員会」によって死者の家ないし、棺の安置所に掲げられる。

「治喪委員会」は主席団、財政、文書、総指揮、交通、委員などを担当する者からなり、その名簿も張り出される。⁽³¹⁾

iii) 葬送と埋葬

翌朝、棺は前庭に出され、この棺を前にしてごく簡単な儀礼が催される。遺族のみならず、知人・友人、村人たちも参加し、前夜の儀礼に比べてより広く開かれた儀礼である。特にこの時は死者の娘と娘の夫たちにより供物が捧げられる。この時の供物の配置は家の前庭の横に棺が（足を門の方に向けて）置か

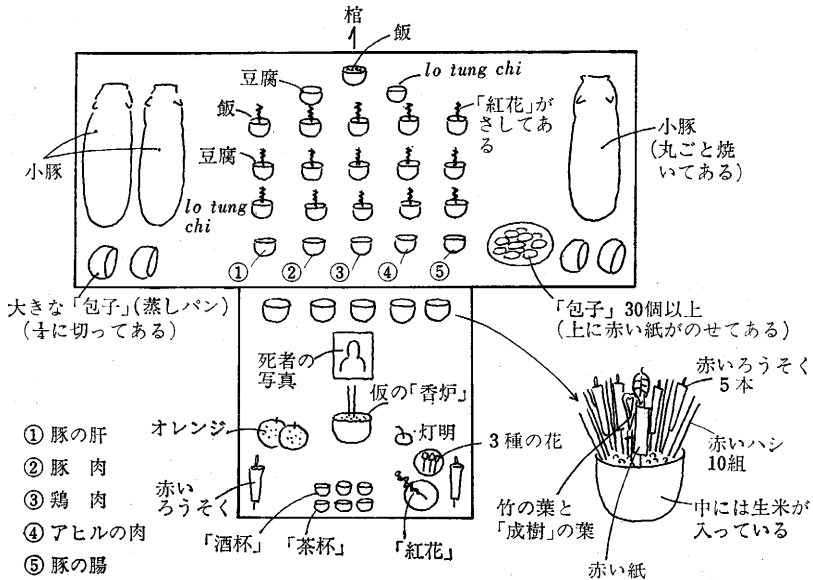


図3 葬送前の供物

れ、供物のテーブル、供物を置いた椅子、赤いのぼりが順に門に向かって置かれる。供物は図3のようなものであった。テーブルの上の5組の飯、豆腐、*lo tung chi*（ゴマをあえた餅）の碗の意味は死者と死者の4人の息子たちの分であると言われ、さしてある「紅花」という花は長命を象徴していると言う。また生米を入れた5つのつぼは4人の息子たちと「大孫」（長男の長男）が持ち帰り、7日以内にこの3碗分の米を炊いて家族で一日のうちに食べおわるという。ハシはその時に使われるものである。

＜葬送前の儀礼＞

(i) 娘と娘婿の儀礼

1) (3組の)娘と娘婿(赤いたすきを肩からかけている)が棺に向かって拝む。

2) 主司祭がのぼりの方を向いて読経。のぼりは娘婿によって送られたものであり死者の名前と年齢が書かれている。⁽³³⁾

3) 遺族が「紙銭」を燃やす。

4) 娘と娘婿がのぼりをもってテーブルの右横にたてる。

(ろうそくはその下に置かれる。リンゴ、オレンジは彼らによって食べられる)

(ii) 遺族全体の儀礼

1) 遺族一同、ひとり1本ずつ線香をもって棺に向かって拝む。

2) 主司祭が小さなシンバルをたたきながら読経。

3) 主司祭が棺の周りを回って水を撒く。

4) 一同拝む。その後主司祭の後に続いて棺の周りを3周する。

5) 主司祭の読経。一同三拝。主司祭が竹竿(前夜「功德」で使われたものと同じ)を振る。

6) 主司祭が「茶杯」、「酒杯」を3つずつこぼし、供物をもって拝む。遺族一同も7度拝む。

(以下は遺族の中に有力者がいる場合のみ行われる)

7) 各種の団体の代表、S村の代表、友人代表がテーブルの前で拝む。そのやり方は皆同様で線香、「茶杯」、「酒杯」、花をもってそれぞれ一度ずつ拝み、その後3度おじぎをする。

8) 遺族の代表(息子たちが交代でする)が各団体に寄付金の小切手を渡す。

この儀礼においてのみ、遺族以外の人びとは死者との別れをする場をあたえられる。遺族の代表から各種の団体への寄付は遺族たちの社会的地位を高めるものである。中国語新聞にこの種の寄付に関する記事が出る事も少なくない。

＜葬送＞ 葬送は葬送儀礼の過程の中で最も公共性の高いものである。葬送の列の大きさはそれだけ葬儀の規模が大きい事を物語る。葬送は死者の家を出発し、墓地まで続く。ただし墓地までの道程が長い時には適当なところで参列者は解散し、棺と遺族、それに埋葬を手伝う村人のみが墓地へと向かう。

葬送の列の最前部には赤いのぼり、村人及び友人・知人たち、その後から棺をのせた車(ドラと太鼓の楽隊が乗っている)、最後に線香をもった遺族が続く。車からは行き過ぎる道の両側に「銀紙」が投げられ、ドラが激しく鳴られる。沿道の人びとはこの葬列を見送る。この村では葬列には決まって次の4つの葬列のための幕が行進する。小学校の校友会、「董事部」(理事会)、「家教協会」(PTA)、及び「馬華支会・馬青支会」(村にある政党の支部及びその青年部)の幕である。これらの幕は小学生たちと、村人たちによって担われる。その他にも遺族が参加している会館(例えば潮州会館)の幕が行進する事もある。また「勤」の妻の時のように規模が大きく、スンガイ・ブサルの町の大通りを葬送の列が行く時には棺を乗せた車に2本の長いワイヤーがつけられ、そのワイヤーを100人以上の友人・知人が引いて行く。参列した人びとはタオルないし「紅包」が配られる事がある。

＜埋葬＞⁽³⁵⁾ 墓地に到着した棺は早速、既に掘られている(多くの場合近隣のインド人人夫たちによって)墓穴の中に入れられる。その位置は慎重に決めら

れ、ごくわずかなズレでも細かに修正される。棺を降ろすにはまたゆうに十数人の男たちを必要とし、この作業にはかなりの時間がさかれる。棺が無事に納められると、簡単な饗礼をして、供物が捧げられ、遺族たちは仮の「香炉」をもって死者の家に戻る。埋葬に立ちあう遺族はごく少数の近しい男たちに限られ、その他の遺族たちは葬送の途中で道に線香をさして引き返す。

＜埋葬の饗礼＞

- 1) 棺を墓穴に入れる。
- 2) 「種子」⁽³⁶⁾の中身を穴に撒く。
- 3) 遺族、村人とも上から土をかける。
- 4) 赤いのぼりを棺にかける。
- 5) さらに土がかけられる。
- 6) 主司祭の読経。
- 7) 墓に供物を捧げて拝し、「紙銭」⁽³⁷⁾を燃やす。
- 8) コンクリートのふたをして主司祭が読経。
- 9) 長男が「種子」の中身を撒く。周りにいる遺族がそれを受け取る。それは持ち帰られる。
- 10) 墓の周りの土をかめに拾う。

村の共同墓地の場合にはレンガ、セメントが運びこまれて、埋葬作業を村人たちが行う。この作業は重労働であり、若い男たちにとっても決して楽ではない。セメントとレンガで埋めるのにゆうに1時間を越える作業量となる。埋葬を終えて死者の家に戻ると、客間には新たな死者のための祭壇⁽³⁸⁾が作られている。主司祭が祭壇に向かって読経し、遺族は線香をもって拝む。その後主司祭が水を撒く。作業を手伝った村人たちの労をねぎらうために死者の家、ないし「飯店」(食堂)で酒食⁽³⁹⁾のもてなしがある。

Ⅳ. 埋 葬 以 後

i) 百日の喪

埋葬が終わり、村人たちは三々五々それぞれの家に帰る。遺族たちもまたそれぞれの家に戻り、死者の家にはその家の家族だけが残る事になる。

死者の家の客間では相変わらず「生」の要素は覆われる。客間にはテーブルと椅子が置かれ、椅子にはしばしば死者の衣服が掛けられる。つまりこの期間においてはこの椅子が死者の存在を明示している。テーブルの上には仮の「香炉」が置かれ、灯明がともされる。⁽⁴⁰⁾洗面器とタオルがテーブルの横に置かれ、毎日水が取り替えられる。日に幾度も線香で死者を拝し、「紙銭」が燃やされる。客間は100日の間ずっと死者の居場所となる。この100日の間には何回か死者を拝する日が設けられる。例えば「柩」の母親の時には次のように日が定められた。「頭旬」一九月初八（死亡した日を第1日目として7日目）、「二旬」一九月十五、「三旬」一十月初一、「四旬」一十月十五、「五旬」一十一月初一、「六旬」一十二月十二（100日目）、⁽⁴¹⁾暦はすべて「農曆」である。

この100日の間遺族は喪服を着続けるか、或いは喪章をつける。⁽⁴²⁾男たちが喪服を着続ける事はないが、死者の娘や息子の妻たちは喪服を着続ける事が多い。喪章は父親が死んだ場合には左肩に、母親が死んだ場合には右肩につけられる。また100日の喪の間には様々な禁忌が課せられる。しかし実際には守られているものは少なく、主に吉事に参加しない事と服装について色の鮮やかな赤や黄を避けて黒、白、青などの色のものを着る事がその大要である。たとえこの服喪の間に正月がきても祝う事はなく、村中が年に一度の吉日に沸き立つ時、ただ死者の家のみはひっそりと取り残されたように静まりかえっており、その対照がひときわ死者の家の服喪の重さを漂わせる。

ii) 百日目の喪明けの儀礼

100 日目の喪明けの儀礼は死者にとっても、生者にとっても非日常的な移行過程から定常的な過程への復帰を意味する。遺族たちはもはや服喪の義務を負う事は無く（1 年ないし 3 年の間服喪すべきであるとも言われるが、実際にはそのような長い期間にわたる服喪が日常生活においてははっきりと見てとれる事はない。）日常生活に戻り、死者はこの儀礼において初めて祖先として村の社会生活の中に位置づけられる。

喪明けの儀礼は死者の家で行われ、葬送儀礼の時に集まった遺族の大部分がこの時にも参集する。儀礼は道士が来て行うこともあるが、必ずしも道士を伴わない事もある。⁽⁴³⁾「紙の箱」を燃やし、その周りを遺族が円陣を組み、線香をもって拝す。この時はまたいよいよ死者がこの死者の家を離れる時でもあり、女の遺族の中には泣く者が多い。この時に死者の衣類や「金紙」／「銀紙」が同時に燃やされる。この儀礼は喪明けへの解放感を伴ったものであり、遺族たちの間から笑い声が聞こえることもある。

<喪明けの儀礼>

1) 司祭が死者の祭壇の前に立ち、ドラをたたきながら読経。遺族たちはひとり 2 本ずつ線香をもち、死者の祭壇の周りにひざまずいている。読経の終りに司祭が祭壇を強くたたき、白いろうそくが倒れ、すぐそれは片づけられる。遺族が線香を炉にさす。

2) 遺族が「紙の箱」（3 箱あって、2 箱はすでに亡くなっている父親の名、1 箱は死者の名となっている）と籠に入れられた金紙・銀紙をもってテーブルを拝み、その籠を家の前庭に持出す。

3) 司祭が読経。遺族は線香をひとり 2 本ずつ持っている。その後「紙の箱」の周りを 3 周し、「紙の箱」の横に置いてある仮の「香炉」（赤いろうそくが 2 本さしてある）の前に来る度に線香をもって拝む。

死者との別れ

4) 次に「紙の箱」の横を3周し元の場所に戻る。

5) 遺族が輪になって「紙の箱」を取り囲む。「紙の箱」と「紙銭」に火がつけられ、遺族は声をあげて泣きながら線香をもって拝む。

6) 遺族の服喪のかぶりものは燃やされ、帯と上着は火の上で1度あぶられる。

7) 家の中に入り、覆いの取り払われた通常の祭壇の「老父」(父方祖父)、「老母」(父方祖母)を拝む。

8) 各自線香をもって「大伯公」を拝む。⁽⁴⁴⁾

儀礼の始まる前には、ふんだんな供物が死者に捧げられる。⁽⁴⁵⁾

この時に墓が完成し、墓に参る事が多い。墓は夫婦ごとに作られており、碑名には夫婦の姓名、死亡年月日、中国本土の出身地が刻まれる。新しいものの中には写真をはめこんだものもある。妻を複数もった夫の場合には妻の名前全部が刻まれる。何れの場合でも男が左側、女が右側になっている。墓自体に対する神聖さは日本と違ってあまりなく、遺族も村人も墓に平気で座る。完成した墓には供物を捧げ、赤いろうそくをたてる。道士が簡単な儀礼を行い、遺族はサトウキビの長い茎を何本か墓の後部に植え込む。

<墓での儀礼>

1) 墓の背面の「祥虎爺」に供物を捧げて拝む。⁽⁴⁶⁾

2) 墓碑の上部を赤い布で覆うと同時に金色の人形 (*tin hua*) を飾りつける。

3) 墓碑の文字を塗り変える。(金色ないし赤色のものを緑に)

4) 供物を捧げる。⁽⁴⁷⁾

5) 線香を持って墓碑を拝む。

6) 各人1本ずつサトウキビの茎をもって墓の周りに立ち並ぶ。この時に記念撮影をする。そのあと、このサトウキビは一部分その場で食べられ、4本は墓の後部の盛り土の部分に植えられる。またパイナップルも同様に1個埋めら

れ、五穀が墓の土の上に撒かれる。

7) 「紙銭」が墓の前で燃やされる。

8) 再び線香をもって各人が拝む。

墓の完成と同時に、祭壇には「香炉」が置かれ、こうして死者は祖先となつて墓と、子孫の世帯の祭壇の双方に正当な位置を占める事になる。

iii) 清 明 節

清明節は毎年、農曆に従って行なわれる祖先崇拜である。この村においては清明節の1週間前ぐらいから墓掃除や、供物をもつての参拝が始まる。墓地全体の草刈は共同で人夫（近隣のインド人である事が多い）を雇って行く。この清明節の前後はふだん、雑草におおわれて姿を隠している墓地が唯一度、その全容を表す時である。最も参拝の多いのは清明節当日であり、この日は各家の参拝の他に、村人が共同で出し合った資金で調達した供物が「公司」墓と呼ばれる、身寄りのない人や幼くして死んだ人のための墓（実際には墓としての体裁をとっていない土盛り）に供物が捧げられ、その供物は後に各世帯に平等に分配される。清明節を過ぎてからの参拝は皆無に近かった。

参拝の仕方は兄弟で両親の墓に参る事もあるが、各世帯ごとに参る事が多い。必ずしも世帯主が参るとは限らず、世帯主の妻だけが参る事も少なくない。しかしながらふだんの廟への参拝と比べると男性の数が多い事が眼につく。既にこの村を出て行った者でも、祖先の墓に参る者が少なくない。また親もとを離れて働いている若者たちも村に帰る事が多いので、清明節の前後は村が賑わう。

参拝をする者は普段着であり、供物、線香を供えて参拝し、その後色のついたたんざく⁽⁴⁹⁾を墓の後に埋めこみ、参拝した証拠とする。墓の前で参拝者が供物を食べる事はない。墓の後の土盛りは大きければ大きいほど子孫が繁栄すると言われ、毎年高くされる。また各世帯でも祭壇に供物が捧げられる。

V. お わ り に

村人たちの祖先は60～70年前に、はるか中国本土を離れてマレーシアの地に渡って来た。以来綿々と潮州文化を子孫に伝え残している。生物がその種としての属性を子孫に伝えるのは主に生殖においてであるが、人間が民族としての特性を子孫に伝えるのは誕生以来の絶間ざる社会化の過程の中においてである。こうした親世代から子世代への文化の伝承は親世代が祖先となる事によって完結する。葬送儀礼は親世代との別れであると同時に、子世代の独立であるとも言えるのである。

世帯を通して親から子へと伝えられて来た民族としてのアイデンティティは墓と家の中の祭壇にいる祖先によって表徴される。S村においては祖先は族譜上に位置をもつ事はなく、ただ今ある世帯の親世代、ないし祖父母の世代である事を示すばかりである。それはちょうど鎖が連なるのに似て、遠く本土から渡って来た祖先崇拜の連鎖が世代を経るごとに葬送儀礼によって新たな鎖を閉じながら、今日までつながって来ているのである。そしてS村内で緊密に結ばれる親族・姻戚関係をはじめとする種々の社会関係は、この世帯を通してつながる連鎖を互により合わせてS村における潮州文化の伝統を担う太い鎖の束にして、綿々と本土の潮州文化を伝えているのである。

資 料

二晩にわたって行なわれた「通」の母親の「功德」の概略は以下のようである。

<第1日目>

1) 祭壇に向かって司祭の⁽⁵⁰⁾説経。線香3本をもつ主司祭を中にはさみその左右にそれぞれ木魚と鐘をもった2人の副司祭が立つ。助手4人が祭壇前のテーブルの左右に立ち、唱和する。遺族たちはひとり1本ずつ線香をもち、司祭たちの後に座る。

2) 祭壇前のテーブルから赤いろうそく2本と仮の「香炉」をもって祭壇に移す。(テ

ーブルの上の供物はすぐに片づけられる。)死者の長男は竹竿をもっている。竹竿には阿弥陀佛により死者の魂を「西方」に導くと書いた白い布がつけられている。⁽⁵¹⁾ 3人の司祭が祭壇の前にひざまずいて読経する。その後、遺族一同が三拝する。

3) 司祭の後に続いて遺族が家の中に入る。棺(足の方)に向かって司祭の読経。棺の前には死者の写真、仮の「香炉」、灯明、「紙銭」の上に立てられた白い札がある。この札にはこの日の農曆の日付と死者を無事に「あの世」に引き渡すための免状である旨が書かれている。⁽⁵²⁾ 主司祭が棺の周りを回って「成樹」の葉で水をまく。それから竹竿を2、3度振る。その後一同が拝む。また読経。主司祭が竹竿をもって3度横、3度縦に回して、それを棺の横にもたせかける。(このあと一同休息、この時に主司祭は「魔よけ」の黄色い符を家の戸口と棺の端(足の方)に貼る。)⁽⁵³⁾

4) ドラ、太鼓とシンバルが激しく鳴らされる。

5) 遺族がまた線香をひとり1本ずつもち、祭壇の方に向かって三拝する。その後司祭の読経。1)と同じ配置。

6) 副司祭のひとりが竹竿をもって家の中に入り棺の周りを回る。遺族が線香をもってその後にく。

7) 副司祭が棺(足の方)に向かって読経。

8) 家の外に出て副司祭を先頭に4度回る。遺族の先頭は「大孫」で、棺の前にあった札をもっている。副司祭は鐘を鳴らしながら静に歩く。

9) 副司祭が読経。1)と同じ配置。

10) 副司祭を先頭に家の前を1回りして家の中に入る。棺の前でひとりずつ拝んで線香を棺の前の仮の「香炉」の中に置く。

(休息、遺族、参観者ともに粥を食べる。)

11) 副司祭ひとりを先頭に遺族が棺の周りを回って外に戻る。副司祭が竹竿をもって祭壇の前に立つ。副司祭の読経。周りに4人の助手がいて彼らも歌う。

12) 副司祭を先頭に家の前を2度回る。「大孫」は札を持っている。

13) 副司祭が読経。

14) 副司祭を先頭にして家の前を2度回る。その後家の中に入る。棺の前の仮の「香炉」に線香をさす。竹竿は棺にたてかけられる。

死者との別れ

<第2日目>

この夜には後から駆けつけた親族も加わり、儀礼を行う遺族の数は昨晚より一層多くなっている。

1) ドラと太鼓が鳴らされる。

2) 3人の司祭が祭壇に向かって読経、遺族はその後に線香を1本ずつもって座る。その後一同三拝。

3) 司祭を先頭に家の中に入る。(棺の位置は前日と同じ) 棺の前(足の方)で3人の司祭が読経。長男が竹竿をもつ。他の遺族は膝をつけて座っている。

4) 読経の後、主司祭が竹竿を3度回す。その後また読経。

5) 主司祭が竹竿をもって2度振り、3度回し、また棺にかける。遺族は線香を棺の横に立っている助手に渡し、棺の周りを回って、元の位置に戻る。この時棺の前で拝む遺族もいる。

6) 2)と同様に読経。

7) 副司祭ひとり为先頭に遺族は家の中に入る。棺の周りを回って家の外に出る。副司祭は竹竿をもち、長男は札をかかえている。家の前を3周する。その後副司祭が竹竿をもって祭壇の前で読経。

8) 副司祭を先頭に家の前を3度回る。副司祭一息子一娘・息子の妻一孫一孫娘・孫の妻一娘の夫の順。(この順は儀礼の他の場面においても基本的に変わらない。)

9) 副司祭が祭壇の前で読経。

10) 副司祭を先頭に家の前を1周し、家の中に入る。(遺族全部は入りきれず、外に出ている遺族もいる。)この時に女性の遺族の間からしきりに泣声が聞こえる。男性のなかにも泣いているものがある。

11) 棺の周りを1回りして外に出る。

12) 家の前を2回りしてまた10)の形。

13) その後線香を棺の前の仮の「香炉」に立てる。

<休息>

14) 「紙の家」が祭壇に相対するようにして前庭の端に立てられる。⁽⁵⁴⁾ 遺族は皆「紙の家」に三拝し、その後線香を「紙の家」の前に置かれたテーブルの上の仮の「香炉」に

立てる。(このテーブルにも供物が捧げられる。)

15) 主司祭がシンバルを鳴らしながら「紙の家」に向かって読経。その周りで遺族が拝む。

16) 主司祭が「成樹」の葉に水をひたして「紙の家」の前に水をまく。

17) 主司祭が筆で中空に文字を書く。その後「紙の家」のある部分(例えば人の目や口)にも書きたす。この時司祭は何か口で唱えている。

18) 主司祭が読経。その後竹竿をもって3度振り、3度回して元の場所に戻す。

19) 主司祭が読経。その後一同拝む。

20) 「紙の箱」2つをテーブルの前にもってくる。長男がそれを1つずつもって拝む。「紙の箱」はその後テーブルの横に置かれる。

21) 遺族一同が拝む。

22) 主司祭が鐘を3つたたく。

(「紙の家」の左右の人形の前で「紙銭」が燃やされる。休息。)

23) 副司祭ひとりを先頭に遺族が家の中に入る。棺の周りを1回りして元の位置に戻る。

24) 副司祭が読経。

25) 副司祭が「種子」の中身をまく。(中に本物のコインがまじっている。)

26) 副司祭が竹竿をもって読経。

27) 副司祭を先頭に家の中に入り、棺の周りを1回りして外に出る。その後家の前を3周。

28) また副司祭(と助手)が読経。

29) 家の中に入り、棺の周りを1回りして外に出る。その後家の前を3周する。

30) ⁽⁵⁵⁾司祭ひとりが祭壇に向かって読経。

31) 助手たちの合唱。

32) 家の中に入り、棺の周りを1周し、その後外に出て、家の前を1周。元の場所に戻る。

33) 長男が主司祭から渡された「茶杯」の茶を飲む。その後、二男、三男、四男そして3人の娘たちが同様に飲む。

死者との別れ

34) 司祭が祭壇に向かって読経。

35) 助手たちの合唱、その後副司祭の読経。

36) 副司祭を先頭に棺の周りを1周して外に出て2周する。

37) 家の前を回り前庭に置かれたたらいにコインを投げ入れる。これを6度繰返す。

38) 家に入り、各自線香をもって供える。

<休息>

39) 遺族一同祭壇に向かって線香で三拝。

(⁽⁵⁶⁾
家の前には橋が置かれている。)

40) 司祭3人が祭壇に向かって読経。

41) 主司祭が橋の周りに「成樹」で水をまく。遺族一同はその後に続く。

42) 副司祭(肩から赤いけさをかけている)が遺族を家の中に導く。長男が棺の前に置かれた仮の「香炉」、次男が札、三男が死者の写真、四男が竹竿をもって、遺族は家の外に出てくる。

43) 副司祭の読経。

44) 司祭が祭壇に向かって読経。

45) 橋の上に置かれた物のうち「酒杯」の中の酒は捨てられ、*kuih*, オレンジは片づけられる。ろうそくと線香は橋の横のたらいの側に置かれる。

46) 司祭の読経。その後助手たちの合唱。

47) 副司祭を先頭に家の中に入り、棺の周りを1回りする。

48) 家の外に出て1周。

49) 家の戸口の側から橋を渡る。橋を渡る時に遺族はコインをたらいの中に落とす。先頭の副司祭は竹竿を持ち、長男が仮の「香炉」、次男が札、三男が死者の写真をもつ。橋を渡り終わるとその横を家の戸口の方にもどり、また大きく前庭を回って祭壇の前を通り、橋の前にくる。これを7度繰返す。橋を渡る時には副司祭が立ち止まり読経。7度目の時には副司祭が橋の上で竹竿を3度振る。

50) 家の前を2周してまた橋の前で副司祭が読経。橋の途中で副司祭が立っていると司祭が祭壇に向かって読経。

51) それに副司祭が答えるようにまた読経。

52) 副司祭が読経を終えて橋を渡り終わった時も司祭の読経は続く。遺族も副司祭の後に続いて橋を渡る。

53) 副司祭が祭壇の前で読経。遺族は元の場所に戻っている。

54) 副司祭の後に続いて遺族が棺の周りを1周し、外に出て家の前を3周する。

55) 遺族は元の場所に戻っている。司祭が遺族の名前をひとりひとり呼びそのたびに鐘がうたれる。(その順は息子、娘、息子の子供、弟、弟の妻、息子の妻、妹、養子、娘の夫、息子の孫、娘の孫とされている。)

56) 家の中に入り棺の周りを今までと反対回りに1度回って家の外に出る。家の外を1周。

57) 橋を今度は反対側から渡る。これを5度繰返し、家の中に入る。竹竿は棺の上におかれ、遺族は線香を飯の「香炉」にさす。

(終了)

- 1 マレー語を母体として、それに英語などの外来語を取り入れたもの、マレーシア国内では *Bahasa Malaysia* と呼ばれる。
- 2 インド人の中にはキリスト教やイスラム教を奉じている者も少なくない。例えば1970年のセンサスでは半島部マレーシアのインド人の宗教別割合はヒンドゥー教81.2%, キリスト教8.4%, イスラム教6.7%, その他3.7%となっている。
- 3 この論文では中国人とは民族としての中国人 (ethnic Chinese) の意味で用いる。
- 4 中国人の中には「徳教」(仏教、道教、儒教、キリスト教、イスラム教の各要素を習合させたもの) を信奉している者も少なからずいる。
- 5 「鬼」と呼ばれる神でも祖先でもない霊的存在。
- 6 例えばババ (Baba) と呼ばれるマレー文化の影響を強く受けた中国人たちは日常言語としてババ・マレー (Baba Malay) という特殊なマレー語を話すが、彼らの葬送儀礼は本質的に中国式的ものである。(J. R. Clammer 1980 *Straits Chinese Society*, Singapore University Press)
- 7 S村はセランゴール (Selangor) 州北西部に位置し、世帯数は129、人口は1,046人である。S村についての詳細は川崎有三1984「マレーシア潮州人漁村の有力者たち」、『民族学研究』第49巻第1号 pp. 1~26を参照の事。
- 8 その他に「観音」、「烏金」(炭を何本か束ねて、それを赤い布でくるんだもの。

死者との別れ

これを祭るとお金がたまると言われている。)「王母娘娘」なども比較的多く見られる。

9 以下の個人名は全て仮名である。

10 この村には「義心社」と「互助部」の2つがある。必ずしも全ての世帯がこのどちらかに加入している訳ではなく、また2つの組織に重複して加入している世帯もある。詳細は前掲の川崎有三1984を参照の事。

11 ある個人を中心にして父方および母方の血縁者とその配偶者により形成される集団。

12 例えば父親同士が「堂兄弟」(父方平行イトコ)である場合に、父の「堂兄弟」の「功德」に参加する事がある。

13 神・祖先を拝する時に燃やされる紙、紙の中央が金色に塗られている。銀色に塗られているのは「銀紙」である。

14 しかしながら、死者の家はその経済活動全体をとめるとは限らない。例えば「耀」の家では葬送儀礼の合間をぬって豚に飼料を与えていた。

15 額には赤地に黒い字で出身地が書かれている。例えばこの村では次のような対応をしている。「謝」―「賓樹」,「陳」―「潁川」,「黄」―「江夏」,「王」―「太原」,「潘」・「鄭」―「榮陽」,「盧」―「范陽」,「蔡」―「濟陽」,「林」―「西夏」,「胡」―「安定」,「莊」―「天水」。全世帯の約8割にこの額が掲げられている。

16 この村では「天官賜福」と書かれた神棚が作られる事が多い。

17 例えばベラ州のトゥロ・アンソン (Telok Anson) の町など。

18 「金紙」,「銀紙」を含めた紙幣を擬した紙。

19 この村では「過夜」とも言われる。

20 例えば 0:00―2:00a.m., 2:00―4:00a.m., 4:00―6:00a.m. という3つの時間帯ごとに6〜7人の者が交代で寝ずの番をする。互助組織からは毛布が貸し出される。

21 「柩」の母親の場合、棺が到着してから村の「拿督公」廟に供物(2本の赤いろうそく,線香,「紙銭」,「餅」)を捧げていた。

22 メリケン粉などをこねて焼いた食物。

23 「緑豆」(あずき的一种),モミ,ビスケットという組みあわせもあった。

24 「柩」の母親の場合、順序は「慶」(「柩」の兄の息子),「柩」,「柩」の妹,「柩」の妻,不明,「柩」の長男,孫(息子の息子),孫娘(息子の娘)の夫,孫娘,孫の妻,外孫(娘の子供),曾孫(息子の孫)であった。最初の5人は12回,残りの者

- は3回なでる。3, 4才の子供も母親に手を取られて行う。
- 25 空の棺の儀礼と死者の床での儀礼の順序が逆のこともある。また死者の床での儀礼の後に次の儀礼を行う事がある。1) 遺族はひとり1本ずつ線香をもち家の前に並ぶ。2) 「慶」が家の前の川から大きな急須(儀礼用)に水を汲む。この間遺族は泣いている。3) 遺族は家の中にはいり、死者を拝し、線香を仮の「香炉」に置く。4) 遺族は急須の水に「成樹」の葉をつけ、その葉で遺体を3度なでる。5) その後で村の者がこの急須の水を客間の四隅に撒く。
- 26 埋葬前に打つ事もある。「勤」の妻の場合)
- 27 または *longleng* と呼ばれる。
- 28 長男の場合上半身には何もつけない事の方が多いようである。
- 29 葬儀社の人たちは次のように分類される。指揮役、司祭役、楽隊である。その人数は指揮役1~2, 司祭役3~5, 楽隊5~7人程度である。司祭役の者が儀礼用の服を着ている他は普段着である。司祭役は「勤」の妻や、「通」の母親の時のようにほとんどが女性である時もあるし、また「耀」の父親や「板」の母親の時のように全て男性である時もある。
- 30 例えば「耀」の父親が亡くなった場合には「謝兄弟公司」が150ドルの弔慰金を出している。これは「耀」とやや遠い姻戚関係にある「潮」の意向が反映しているものと思われる。「謝兄弟公司」の実質的な経営者である「潮」は「耀」たちの親族(「鄭」姓の者)と密接な社会関係を結んでいる。
- 31 「勤」の妻や「通」の母親の時には村外の者の名前も連ねられていた。
- 32 椅子の上の供物は、一方にはオレンジ2個、リンゴ1個、「紅包」、*kuih* (マレー語、メリケン粉、卵、砂糖などで作った甘いお菓子)、他方には「紙銭」、赤いうそく2本、線香であった。
- 33 「中華頭姓謝府□氏□□五代母享寿積産七十有六岳母大人之銘旗」(□は死者の姓、□□は名前である。)と書かれてある。年齢は高齢者の場合、実際の年に2, 3才加えたものが書かれると言う。
- 34 潮州会館の代表、「文」の子供の通っている小学校の代表等。
- 35 5例中2例は村外の墓地に埋葬された。「通」の母親は「文」の家の近くの「韓江義塚」(「韓江公会」(潮州人たちの会館)の墓地)に、「勤」の妻は子供たちが住むクアラランブール近郊の墓地に埋葬された。「勤」の妻の埋葬の時にはバス1台がチャーターされて村人たちを遠く離れた墓地に運んだ。
- 36 五穀を撒く事もある。
- 37 (既に配偶者が死亡していて墓が出来上っている場合) 墓碑の前には太い線香2

死者との別れ

- 本をたてた飯の「香炉」,「茶杯」1,「酒杯」1,豆腐,飯の碗各1,鶏・アヒル・豚の肉,リンゴ2,オレンジ2, *kak* (潮州原産の柑橘類) 2, *kuih*,「紙銭」が,墓碑の向かって右にある「后土」には「酒杯」3,「茶杯」3,鶏・アヒル・豚の肉,リンゴ2, *kak* 4,「包子」(蒸しパン) 5が捧げられる。
- 38 客間の通常の祭壇の前に椅子とテーブルが置かれる。テーブルには死者の写真,灯明,「紙銭」,飯の「香炉」,白いろうそく2本, *yan tsai kao* (赤いゼリー状の菓子) 6碗,「茶杯」4が置かれる。
- 39 この酒食のもてなしの時には葬送儀礼には一切参加しなかった「勤」が村人たちを接待していた。
- 40 死者の写真が置かれる事もある。
- 41 49日目に拝する事もある。
- 42 喪章は白と紺色の布またはセルロイドで作られる。
- 43 中には紙で作られた洗面器,コップ,帽子,衣服,「紙銭」などが詰められている。
- 44 この時「大伯公」には *lo tung chi*, 紅白のダンゴなどが供えられる。
- 45 ほとんど葬送前の時と同じである。
- 46 赤いろうそく2本,豚肉,スルメ,線香等。
- 47 ほとんど埋葬の時と同じである。
- 48 供物はふだん村の廟に参る時と変わらないが,量はかなり多い。酒,飯,ハシなどのようにふだんの廟の参拝ではあまり使われないものもある。
- 49 白,黄,茶,緑,紫,青などの色のもの。
- 50 村人たちは「念経」と言う。必ずしも経文を読誦しているとは限らず,司祭役が念じる言葉は皆「念経」と受け取られている。
- 51 「喃嗶西方接引導師阿弥陀佛超度亡灵□□□住西方(不明)」と書いてある。□□□は死者の姓名である。
- 52 「亥酉年五月二十九日如時,三宝資度大梵壇沙門牒封,内牒給付七过女官(□□□)一位神魂收執為照」と書かれてあり,壇の字のところに印がある。□□□は死者の姓名。
- 53 「普庵佛□五安□押然除邪□□」と書かれている。□は判読困難な文字。
- 54 「紙の家」はきらびやかに飾られ,自動車,自転車,人のミニチュアが置かれる。「追云樓」,「逍遙府」などの額がかけられ,門の両側には向かって右に「魄散南天」,左に「魂云西竺」の文字が見える。家の両側には向かって右に金山,左に銀山が置かれ,それぞれの前に男と女の等身大の人形がある。

- 55 主司祭でも、副司祭でもなく葬儀社の中で指揮役をしていた男性。
- 56 橋の上には「酒杯」3つ、*kuih* 4つ、オレンジ2個（横に「紅包」が置かれる）、「紙銭」、鶏の肉・アヒルの肉、赤いろうそく2本と線香3本が、それぞれ橋の中央を対称軸にして左右に置かれる。ただし鶏の肉とアヒルの肉はそれぞれ片側だけに置かれる。橋の周りには「菊花」（菊の花）が片側4本ずつ置かれ、祭壇から見て橋の右側に水のはいったたらいが置かれる。

参 考 文 献

- Ahern, E. M. 1973 *The Cult of the Dead in a Chinese Village*, Stanford University Press.
- Evers, Hans-Dieter 1973 *Modernization in South-East Asia*, Oxford University Press.
- Freedman, M. (ed.) 1970 *Family and Kinship in Chinese Society*, Stanford University Press.
- Hsu, F. L. K. 1971 *Under the Ancestor's Shadow*, Stanford University Press, (Originally published in 1967)
- 窪 徳忠編 1981 『東南アジア華人社会の宗教文化』, 耕土社
- Leach, E. 1961 *Rethinking Anthropology*, Athlone Press, (paper back edition with corrections, 1966)
- 李 亦園 1970 『一個移殖的市鎮—馬來西亞華人市鎮生活的調查研究』, 台北, 中央研究院民族学研究所
- Wolf, A. P. (ed.) 1974 *Religion and Ritual in Chinese Society*, Stanford University Press.
- 呉 瀛濤 1970 『臺灣民俗』, 衆文圖書公司, 台湾
- Yang, C. K. 1961 *Religion in Chinese Society*, University of California Press.